

スポーツを文化的に享受する機軸： ホイジンガとオルテガの文化論のあいから

越川 茂樹

Axis of culturally enjoying sport : From the intersection of the culture theory of Huizinga and Ortega

Shigeki Koshikawa

Abstract

The purpose of this study was to explore each cultural theory that the way of thinking about sport of Huizinga and Ortega was based on, to clarify the ideological commonalities between cultures, and to refer to the background of different views of sport. The results were organized as follows. 1) Huizinga criticized real sport from the perspective of play, but recognized the cultural value of sport itself. Ortega also recognized the cultural value of sport. However, the sport underlying his thought was found to be a kind of ideal image rather than a real sport. Both fundamentally recognized the cultural value of sport. 2) As ideological commonalities between Huizinga and Ortega's cultural theory, the following three points were recognized: (i) culture was an effort to the well-being of the community, (ii) culture was dynamic, and (iii) cultural leaders were required to open up their own environment with a voluntary attitude. 3) Ortega recognized the human and cultural values of sport as a voluntary effort that was a free and vigorous impulse. On the other hand, Huizinga feared that life without a spirit could lead to the loss of culture, and warned that real sport was following that path. Ortega and Huizinga also placed the importance of reason in life or ethical spirit at the core of human and cultural understanding, but the former regarded it as obvious and the latter pointed out the danger.

key words: spontaneouseffort, well being of the community, dynamics of culture

1. 緒 言

現代の日本において、スポーツは文化として認められ、多くの人々が生涯にわたり様々な形でスポーツを享受している。裏を返せば、スポーツがいかに文化的に享受され得るかが人生の課題の一つになっているといえる。今日、文化とは、「精神的完成への努力」(中田, 1998, p.1423)や「精神的・理想的価値の実現」(田中, 1994, p.781)を基盤とする真善美の追求、知の伝承、あるいは感動の提供といった高度な精神活動であるとする精神的・規範

的な捉え方があるものの、総じて、「一定の人間集団の生活様式の全体」(中田, 1998, p.1423)として広い意味のもとで定義されている。こうした文化理解のもとで、スポーツの文化的承認やその文化的享受といった我々とスポーツとの関係をめぐる今日の状況が語られている。

とはいえ、我々は、暮らしの中で文化を何らかの判断基準と結びつけて語り、そのあるべき姿を求めている。有形・無形を問わず、財として文化を維持すべく、あるいは文化として認めるべく日々多くの人々が世界中で尽力している。こうした状況は、「一定の人間集団の生

北海道教育大学教育学部釧路校
〒085-8580 北海道釧路市城山1-15-55

Hokkaido University of Education Kushiro
1-15-55 Shiroyama, Kushiro, Hokkaido.085-8580

著者連絡先 越川 茂樹
koshikawa.shigeki@k.hokkyodai.ac.jp

活様式の全体」として文化を理解することのみから生じてくるのではないと推察される。そこには、何らかの文化に対する価値的・規範的な判断基準が存在していると考えられる。したがって、たとえ今日広義に文化が捉えられようとも、スポーツの文化的享受を問題とする際には、「文化的」の判断基準としての文化の意味が問われてもいることになる。クローバーとクラックホーンは、「多くの文化概念を通覧し、整理した結果、たいていの社会学者が同意すると思われる定式化を試み」(生松, 1968, p.100) ている。それによると、文化は、シンボルによって獲得され、また伝達される行動の様式、または行動のための様式から成るが、文化の本質的な核心は、伝統的な(すなわち、歴史に由来し、歴史的に選択されてきた)諸概念、特に附せられた諸価値からなっている(Kroeber and Kluckhohn, 2017, p.181)。つまり、人間の行動様式全体として文化は広義にとらえられてはいるが、その核心には規範的な尺度や価値があるということである。このように日常的にも学術的にも文化の意味を問題にするとき、そこには何らかの価値が絡んでいることが認められる。

翻って、スポーツについてみると、今日、「すべてが文化になり、したがって文化は一定の生活領域ならびにその特殊性を表す一種のおおまかな方向づけの尺度であることにより、スポーツも文化の一部、ないしは文化的な(日常)生活の一部」(グルーベ, 1997, p.30) になったという認識に何ら違和感を抱くことはないであろう。こうした認識のもとで、我々は、スポーツが人々の可能性を拓いたり、絆の尊さを気づかせてくれたりといった美しい面をもっていることを実感している。しかし、トップレベルの競技スポーツのみならず、市民レベルのスポーツにおいても差別や暴力、不正、ならびにスポーツ自体への差別や偏見・蔑視といった問題が生じている現実にも我々は直面している。一方では文化観の変化、他方では世界的な規模におけるスポーツの普及とそれと結びついたスポーツ概念の拡張(グルーベ, 2004, p.4) に基づいて、スポーツは文化として認められるようになってはきたが、良い面や美しい面とともに不愉快な面や醜い面も我々は経験し認識しているのである。ここでこうしたスポーツ(文化)に対する見方を察するに、そこにも明らかに何らかの規範的・倫理的な尺度があり、それを規定していると考えられる。スポーツは、スポーツ以外では得ることができない特別な経験や認識をもたらしてくれるゆえ、我々はスポーツを享受するという認識は広く認められるものであろう。そしてそこには、広義の文化理解におけるスポーツといった面に留まらない、おそらくスポーツそのものから導かれるスポーツの価値的・規範的な文化としての意味が付与されているとみられる。その際、スポーツの我々の生にとっての意味として、人間の尊厳や純粋さを評価する一般的な倫理的諸原理が一貫して配慮されているかどうか、またそうし

た諸原理がスポーツの中でも適切な形で示されているかが問われなければならない(グルーベ, 2004, p.34) といった課題と我々は常に向き合っていると考えられる。

このようなスポーツの我々の生にとっての意味から問うスポーツの文化性に関わる判断は、スポーツと文化の関係をどうみるかということからも改めて検討することにより示唆を得ることができると考えられる。グルーベ(2004, p.4) は、かつてスポーツと文化との関係をめぐって、一方では文化観の変化、他方では世界的な規模におけるスポーツの普及とそれと結びついたスポーツ概念の拡張が、独自の「スポーツ文化」の誕生と発展をもたらすとともに、スポーツを文化の一部として成立させたとし、そうした現象を検討する際には、二つの立場が設定できるとした。それに従えば、一つは、スポーツを文化的な退廃であるという見方、もう一つは、スポーツは文化的に価値があるという見方である。前者の立場をとる者として、遊びとは何かと究明したオランダの文化史家であるホイジンガがあげられる。ホイジンガは、遊びから文化を考えていく中で彼の生きた時代におけるスポーツを厳しく批判している。一方、後者の立場としてスペインの哲学者、オルテガをあげることができる。彼は、国家の起源や文化など人間の生活にかかわるものに対してスポーツをモデルにして考え、「文化とは、勤労の娘ではなく、スポーツの娘である」(オルテガ, 1974, p.58) という言葉を残している。スポーツを文化として認める代表的な人物の一人である。

ところが、こうしたスポーツに対して異なる立場をとる一方で、ホイジンガとオルテガには思想的共通性がみられる^{注1)}。ホイジンガとオルテガの思想的共通性について、堀米(1975, pp.214-222) は、堀越(1975) による『朝の影の中で』の訳書の解説において触れている。そこでは、ファシズムに対する批判の書として、ホイジンガの『朝の影の中で』とオルテガの『大衆の反逆』をあげ、それらが大衆社会論のさきがけをなす書物である(堀米, 1975, p.214) としている。そして、堀米(1975, pp.217-221) は、思想的共通性を「文化の倫理的な性格の強調」にみている。もっとも、堀米は、大衆社会論的ファシズム批判として二書を取り上げ、そこにみられる思想的共通性を述べているが、大衆社会論の前提にある人間観や文化観、ましてやスポーツについて論及しているわけではない。

このように、思想的共通性がありながら、両者がスポーツに対して異なる立場をとっている点については疑問が生じるところである。と同時に、思想的共通性があるのであれば、そこにはスポーツと人間の関係やスポーツの文化的価値にかかわる考え方の根底にも共通の思想基盤があるのではないかと推察される。確かに、ホイジンガとオルテガの文化論は、ともに規範的であり狭義の文化理解であると捉えられはするかもしれない。したがって、今日の広義に文化を理解する社会の中にあつて

時代遅れとの謗りを受けることが考えられる。しかしながら、上述のように今日なお我々は、文化について何らかの判断基準によりその存在を確定し、維持したり、洗練させようとしたり、育もうとしたりと努めている。また、社会科学の世界においても文化の核心には、規範的な尺度や価値があるとも指摘されている。それゆえ、スポーツを文化的に享受することをめぐる、その「文化的」ということの判断基準を考え、文化性を見極める上で両者の文化理解を取り上げることは意義があると考えられる。それは、両者の文化論が単なる「精神的完成への努力」（中田、1998、p.1423）や「精神的・理想的価値の実現」としての文化の意味を超えて、人間の生と文化との関係から展開され、「人間の尊厳や純粋さを評価する一般的な倫理的原理」（グルーベ、2004、p.34）としての意味が潜んでいるように思われるからである。それゆえ、そうした文化観を掘り起こし、スポーツを文化的に享受することの機軸を探ることは意義のあることと考えられる。

そこで本研究においては、ホイジンガとオルテガの文化との関係におけるスポーツに対する考え方を確認し、その前提としてあるそれぞれの文化論を探り、文化をめぐる思想的共通性を明らかにするとともに、スポーツに対する異なる見解の背景に言及することを目的とする。なぜなら、このことが、学校における体育の学習に対して基礎的な知見を与えてくれると考えられるからである。今日、学校における体育の授業において、スポーツを生活の内容とするライフスタイルの基盤づくりとして、一人ひとりの内発的なエネルギーに支えられたスポーツの学びが求められている。それは、スポーツを文化的に享受する力を育むこととして望まれるスポーツ教育の方向性といえる。その際、どのような享受が「文化的」であるのか、あるいは「文化的」に享受するとはいかなることなのか、その規範的・倫理的な尺度が問題となる。それゆえ、多様化する現代のスポーツ状況を踏まえて、改めてそれを検討して見出していくことが必要であると考えられるからである。

2. ホイジンガにおけるスポーツ文化批判

ホイジンガ（1989b、pp.324-325）は、彼の生きる時代のスポーツについて、本来の文化過程の脇に外れて位置し、文化の歩みはスポーツとは無関係となっていると批判する。ホイジンガ（1989b、p.324）は、文化の発展には、遊びの精神が不可欠であるが、スポーツからそれが消え、「遊び」と「真面目」の際限のない混淆状況が生じ、文化的な基盤が失われているとみるのである。その理由として、スポーツ（制度）は、19世紀後半から、規則はより厳重になり、達成目標はより高められて遊びの性格がより真面目に受け取られていく傾向をたどったことをあげる。一方、スポーツの中で遊びとして自覚さ

れ、認められた活動とは、ある程度まで技術的組織、物質的設備、科学的配慮などを伴って行われるものであるから、その集団的、公共的催しは本来的な遊びの情緒を失わせる危険をもっている（ホイジンガ（1989b、p.327）は述べる。つまり、彼は、スポーツの主たる特色である、腕前（技巧）、力、忍耐力等を競い合い、より高いものに向かって努力する形式が、社会における技術や科学などの物的な恩恵を受けることにより、ますます人々の生活に浸透していくが、その先鋭化のあまり、スポーツから遊びの特色である「任意性や天衣無縫の大らかさ」（ホイジンガ、1989b、p.324）を逸してしまうといった事態を予期していた。ホイジンガ（1989b、p.128）は、人間が常により高いものに向かってする努力を現実化する時の本来生得の機能が遊びであり、競い合う遊びの中で文化へ向かうとしながらも、競技はそうした文化的な生活を超越して激化し、過剰な対抗意識により、真面目さの極みに至り「遊びの情趣」（ホイジンガ、1989b、p.325）が失われてしまう危険性を常に孕んでいると考えていたのである。

そうした危惧が現実のものになってしまったという彼の認識が、スポーツ文化の批判となったと解釈され得る。このことは、スポーツが、われわれの生活にとって豊かな意義を担うものの一つというより、闘争本能をむき出しにした現象となってしまったというホイジンガ（1989a、p.325）の指摘からも理解できる。ホイジンガは、過剰で強力な競争（闘争）心によって、つまり、対抗意識の過剰さが余裕やゆとりをなくし、自由さや自在さのある行為が不自由な外的な義務感の強いものになってしまうことを批難した。集団的、公共的な催しとして数えられるオリンピックや国際競技会が、どれほど人々を惹きつけるようなものになっても、遊びの精神を欠いては、スポーツが文化を創造する活動として高まっていく姿はみられないと彼は考えていたのである。

このようにホイジンガ（1989b、pp.328-329）は、スポーツ批判を遊びと真面目の関係性から説くのであるが、最大トン数の郵便船や大洋最短航路を祝う青リボンといった記録達成の努力にみられるように、遊びの形式にまるで関係のなかったはずの仕事が、どうみても遊びの性格というより他考えられないような性格を副次的に発展させたりしていることを指摘し、真面目な仕事遊びに変質しながら、しかも表向きは真面目で通っているという真面目な仕事の遊び化という実態についても述べる。また、ある大企業は業績を上げるため、競争精神を鼓舞することが重要であると考え、自社のスポーツ団体を作り、さらに労働者をたんに職業的能力からだけでなくサッカーの観点から見ても採用するような事例を紹介し、意識的に自らの社員の間にはスポーツの要素を導入し、遊びを真面目にしてしまうこともあるとホイジンガ（1989b、p.329）は指摘する。ホイジンガ（1990、p.121）は、真面目で重要と思われる活動において、それが遊びの

要素によって貫かれているものと、遊びとみなされてはいるが、演じられ方によって真の遊びの性格を失っている活動があり、それを遊びと真面目の混淆状態として、このように述べている。ホイジンガは、それらを活動の幼稚性と捉えて、文化的な退廃とみるとともに、このことがスポーツの文化的歩みとの無関係な状況にも影響していると考えていたように推察される。一方、スポーツ自体にみられる幼稚性については、対抗マッチ制度が、全体的な興味の中で精神的なものを後ろへ押しやるような形式をとる。また、スポーツ活動の過度な組織化、ならびに日刊新聞やスポーツ新聞のスポーツ記事が多くなるとともに人々の精神的滋養として過度の重要性を帯びる、つまり、競技の公明正大さが国民的感情その他によって破れる時に、著しく現れる（ホイジンガ、1990、pp.124-125）とも述べている。こうしたことからスポーツに対する手厳しい批判がうかがわれる。

しかしながら、ホイジンガ（1990、p.124）は、スポーツについて次のようにも述べている。

今日、スポーツやスポーツ試合において、古い偉大な競技の欲求の充足のために、新しい国際形態が見出されたということは、おそらく、文化の維持に貢献する最大の要素の一つであろう。（中略）この体力や敏捷さや勇気に対する新しい崇拜は、男性にとっても女性にとっても、それ自身疑いもなく、非常に高い価値のある積極的な文化要因と考えられる。スポーツは、精力、活気、秩序、調和を創り出すが、これらは、すべて文化にとって大切な物である。

ここでは明らかにスポーツの文化としての価値を認めていることがわかる。こうした認識のもとで、ホイジンガは、スポーツ活動の中へと幼稚性が様々な形や方法で入り込んでいることを指摘しているのである。ホイジンガ（1989a、p.127）は、文化は、遊び「として」、もしくは遊び「から」始まったものではなく、遊びの「中で」始まったと述べる。こうした文化観において、彼は、競争的なものが文化に対してもつ意義は、「競い合う遊びの中で文化に向かうもの」（ホイジンガ、1989a、p.127）であるとも述べている。スポーツには、競い合う遊びという形式のもとで、遊びの精神によって文化へと方向づけられていく可能性があるというホイジンガはみていた。したがって、ホイジンガは、時代の流れの中でその外側から影響を受けながら遊びの性格を歪められたり、失っていったりしてスポーツが変質してしまうことを嘆いていると推察される。ホイジンガはスポーツに対する憂いを語っているのであり、スポーツそのものが文化的可能性のないものであるとは述べてはいないと考えられるのである。ホイジンガは、スポーツに対して遊びという分析視角から当時のスポーツ（文化）を批判した。それは文化がどこまで遊びの性格をもっているかに言及する中で

の現実のスポーツ現象に対する批判であり、彼自身スポーツの文化的価値や文化的可能性は認めているのである。

3. オルテガにおけるスポーツの文化的価値

オルテガは、生の価値からスポーツを理解する。彼は、「スポーツは楽しみではなく、むしろ、努力である。それゆえ、スポーツは労働の兄弟である」（Ortega, 1961, p.33）という。そして労働とスポーツという二つの努力の間における小さな違いに気づくことが重要であるとして、彼のスポーツ観を様々な論述の中で説いている。例えば、オルテガは、義務的な努力を課す労働に對置されるものとして、「いかなる強制からも生じてこない、完全に自由な、かつ生命力の盛んな衝動であるところの別のタイプの努力」（オルテガ、1969、p.255）がスポーツであるとみなしている。そして、オルテガ（1969、pp.255-256）は、次のようにも述べている。

労働においては、仕事に課された目的がその努力に意味と価値を与えるが、スポーツにあっては逆に、自発的な努力が結果として出てくるものを品位あるものにする。後者の努力は、つまり、報酬など望まずに、内部精力があふれ出るかのように惜しげもなく力を消費するぜいたくな努力なのである。だからスポーツ的精神でなされる努力には、つねにすぐれた、絶妙の美しさがあるのである。通常の労働の報酬を計算する場合の量的単位ではかられるようなものではない。

さらに、「全き生とはわれわれの目には常に努力と映ずる」（オルテガ、1973、p.314）と述べる。また、オルテガ（2001、p.50）は、幸福なる勤めは、単に快楽ではなく、それは努力であり、努力こそがスポーツであると述べる。それに続けて、スポーツと労働の努力の違いについて、スポーツとは、奔放自在に、スポーツへの純粹な悦びをもってなされる努力であるのに対し、労働は結果目当てに無理やりなされる努力であると説く（オルテガ、2001、p.50）。別のところで彼は、「人間は生きることで生きることを始めなければならず、それゆえわれわれにとって生は与えられる以上に課せられているものである。したがって、本質的にそれは努力であるが、他方で自由でもある」（オルテガ、1961、p.46）と述べる。そして、われわれは努力する運命にあるにもかかわらず、生きるために備えなければならない、すなわち、生を課題として受け止めなければならないといい、その意味することは、人間の根源における生が、本来的には「スポーツ」であって、強制を伴う必要性ではない（Ortega, Y. G. J., 1961, p.46）と主張する。つまり、スポーツとは、結果目当てで強制力を伴うものではない、自発的な努力の活動である、生の営み、もしくは過程として理解されてい

ることがうかがわれる。

このように、努力という視点から人間の生を捉えて、その中でも自発的な努力、すなわち、「いかなる強制からも生じてこない、完全に自由な、かつ生命力の盛んな衝動であるところの別のタイプの努力」(オルテガ, 1969, p.255)とそうしたものが現れる人間の生きざまに品位や美しさが生まれ、それこそが尊いものであると価値づけられている。そして、まさにその象徴的モデルがスポーツであるとみなしている。

また、オルテガ(1973, p.314)は、スポーツ活動こそが第一次的な創造活動であり、人生において最高度に真摯かつ重大な活動で、勤労活動はそれから派生したもので、生とは本来的にはスポーツの気配を帯びたそれではないとも述べている。彼は、あらゆる生の過程で第一義的なもの、出発点となるものは、余分で奔放自在な意味における活動力である(オルテガ, 1973, p.315)とし、それについて、生物学的知見から説く。そこでは、目の発生が例にあげられている。オルテガ(1973, p.314)は、目が必要であるがゆえに、目がつくり上げられるにいたるのではなく、むしろ逆に、目が現れてきたがゆえに、そのあと有用なる道具としてそれが用いられうるであると述べる。そしてそれに続けて、われわれは、生物(動物と人間)の諸々の現象を、一つは始源的で、創造的で、すぐれて自然発生的で利得を離れた活動と、もう一つはそのような活動が利用されて機械的にされる功利的な性格を帯びた活動の二つの形式に分けられると述べ、それゆえ後者の活動にみられる有用性は、創造や発明もせず、創造されたものをただ利用し安定させるだけである(オルテガ, 1973, p.314)という。スポーツの人間にとっての意味、文化的な価値を高く評価していることがこうした言及からもうかがわれる。

「文化は勤労の娘ではない。スポーツの娘である」(オルテガ, 1974, p.58)とし「人間の実存の最高のかたちがスポーツだ」(オルテガ, 1974, p.58)とオルテガが述べたのは、実利や必要が前提となる努力や活動においては、その前提に阻まれて、われわれの身体的、心理的な構造において創造し工夫することが背景に退き、反対に欲得から離れた余剰の努力やその中に気晴らしを求める活動においてこそ、われわれにとって重要で、価値があると感じ評価する所産が生まれている、という考えに基づいていることが以上のことから認められる。そして、オルテガは後者の努力や活動こそをスポーツにみている。彼は生を努力として捉え、それを二つの類型にわけ、それぞれを労働とスポーツとして語る中で、徹底してスポーツの人間的・文化的意味を主張した。

オルテガは、確かにスポーツの人間の生に対する意味からその価値を高く認めているが、そこで言及の対象としているスポーツについて、現実のスポーツの実態をも射程に入れていると言い切ることは憚られる。彼の思想の根底にあるスポーツは、スポーツ現象における記述が

ないことから、人間的な意味を含むスポーツとしてのある種の理想像であると考えられるからである。実際に、ホイジンガのように、彼の生きた時代のスポーツ現象をもとにスポーツに対する立場を明らかにしている記述は管見する限り見られない。とはいえ、オルテガの場合は、われわれがスポーツを行うときに現れ得る、その望ましい姿を前提として、スポーツの人間的・文化的価値を説いている。こうした見方が拠り所とするオルテガの文化論と、ホイジンガの文化論を読み解き、そこにいかなる共通性が認められるのかについて以下で探ることとする。

4. ホイジンガとオルテガの思想的共通性

4.1. 両者の文化論の対比

ホイジンガの文化論とは、「文化の中にとけ込んでい遊ぶの形式から文化自体を解明する」(里見, 2001, p.123) 点に独自性がある。つまり、彼は、文化がどこまで遊びの性格をもっているかを解き明かそうとしている。こうした遊びから読み解く立場において前提とする文化とは、ホイジンガ(1991)自身が明らかにしているように、ダンテの語る「人間的文化(civilitashumana)」^{註2)}である。その下でホイジンガ(1991, pp.194-195)は、文化の根本には、倫理的なものがあるとし、文化には、精神を備えた生命が不可欠であると考えている。そこで意味し、求められる精神とは、「節制」と「知恵」に関わり、過度なものを抑制する慎ましさをもつことであり、それはギリシア精神から伝わる、中庸を保つこと、均整と調和であるとホイジンガ(1991, pp.162-164)は述べる。また、古典古代において国家感情を母体として生み出された「市民的」という概念が、文化とみなすものの、かなめ石になることの重要性もホイジンガ(1991, pp.164-165)は指摘する。ホイジンガは、市民という共同体に対して、「精神的な糧を与えている、集団的な理想の高さと純度」(ホイジンガ, 1991, p.168)を保障していくこと、つまり共通の倫理的尺度が文化を担い、育んでいく上で大切であると考えていた。

そして、ホイジンガ(1990, pp.26-35)は、文化の根本条件として、「精神的価値と物質的価値の一定の均衡」、「方向づけられた存在」、ならびに「自然の制御」の3つをあげる。それは、一つには精神的なものと物質的なものが調和していることが文化であるが、根本において互いを認める慈愛の精神を欠いていたら文化的に高いとはいえない(ホイジンガ, 1990, p.28)ということである。二つ目として、個人の理想ではなく、特定の集団に限定されない共同体の理想であるところの安寧に向かう努力を文化は含んでいるということである(ホイジンガ, 1990, pp.28-29)。そしてホイジンガ(1990, p.29)は、安寧とは、特定の場所に限定されない、現在だけでなく未来におけるものであり、その追究と達成のためには、

秩序と安全性が求められると補足する。三つ目の「自然の制御」とは、自然（環境）を人間が支配することが文化であるという認識に加えて、人間自身の支配をも意味している（ホイジンガ、1990、p.30）が、人間自身の支配には、自己の欲望やエゴをコントロールするという倫理観を含んでいるということである。別言すれば、共同体の中で生きる上では、人間は何らかの義務を負い、自己犠牲を払わなければならないということである。そうした奉仕の姿勢が文化にとっては不可欠であるとホイジンガ（1990、p.31）は考えていた。これらを踏まえて、「文化とは、積極的に社会の指導原理たる共同体倫理を養い、理想に向けて引き上げるものでなければならぬ」（里見、2001、p.11）とホイジンガは文化の使命を説いた。加えて、文化現象を歴史的に追う中でホイジンガ（1991、pp.170-171）は次のように述べる。

文化とは、有無を言わせぬ力を持って精神を日常生活の事物から引き離すものではあるが、精神的な教養をつむということだけを意味しているのではなく、また単に概念的なものにとどまるのではなく、倫理的な要素を含む、体験であり、活動である。そして、（中略）文化とは、心構えであり、魂の緊張であるという。しかし、我々が文化を所有しているという意識が、完全に与えられるのは日常の仕事を超えた高みにおいてのみではあるが、それは、世界から身を引き離す必要はなく、世界に対して人格的な態度を取ることができさえすればよい。我々が文化の中に、体験された現実性をみるならば、文化は人格の中においてのみ生まれ、その中で健康になり、そのためには、人格の展開と成長を促すような生活様式を持った共同体を必要とする。

このように、文化とは倫理的な要素を含む体験（活動）であり、絶えずその実現に向かう心がまえであるということ、つまり、めざす文化に向かい育む姿勢こそが文化であるとホイジンガは考えていた。しかしながら、ホイジンガ（1991、pp.171-172）は、一般的な義務教育、社会階層の表面的な平均化、精神的、物的交流の極度の容易さによる画一化と多数化に晒され、文化の代用品によって満足する半教養人が文化を担う人格として大敵であると述べる。彼は、現代生活に伴う画一化・多数化が、健全な文化の動勢を妨げると考えていたのである。

一方、オルテガは、生の立場から文化を理解する。彼は、人間の生とは、個人の意思だけで作られるものでもなければ、環境によってすべて支配されているわけでもなく、自らが環境に働きかけながら作り上げていくもの、すなわち、あらゆる可能性の中で選択し決断しながら作られるものであるという基本理念を持っていた。これが、オルテガの「生の理性」という理念である。そしてその根底には、「われとはわれとわれの環境である」（オルテ

ガ、1970、p.32）という考え方がある。ここでいう最初の「われ」とは、生としての私であり、個人的な生を意味し、それが根本実在であると考えている。そして、二番目の「われ」は、意識ないし主観としての「自我」（井上、1970、p.342）、人格や人間性を指している。オルテガは、「私がもし私の環境を救わなければ、私自身を救わないことになる」（オルテガ、1970、p.32）という。私という人格や人間性が常に環境によって規定されるということである。生としての「私」とは、「自我・人格・人間性」と「環境」との「共存」「共生」であり、「対話」であるということの意味し（井上、1970、p.342）、「私」をめぐる環境と直接つながっており、切っても切れない関係の中で実在していると考えている。そうした自我としての私と環境との関係性ゆえに、生きていくためには常に生を課題として受け止め切り開いていく努力をしていかなければならず、そのためには、自らの環境を受け入れるとともに、その環境との力動的な関係の中で対話し自分の生に適合したものを探していくことが重要であるとオルテガはみていた。それは、プラトン派の文化のモットーを示し、「われわれのまわりを取り巻いているものの意味を探求せよ」（オルテガ、1970、p.32）という彼の指摘からも推察される。

彼は、文化とは「生を越えるものの支配に従うという条件を自己のうちにもつところの主観的諸法則を遂行する生機能、生命的である限り有機体内部の主観的事実であるところの生の諸機能」（オルテガ、1970、pp.212-213）であると、し、「生物における消化作用や移動作用と同様、ある生物学的活動に基礎をもっている」（オルテガ、1970、p.213）と述べる。また、文化とは、人間が自己の生に加える解釈、自分の問題や生にかかわる必要なことを処理しようと工夫する、一連の解釈であるとオルテガ（1969、p.110）は述べる。ここに文化とは、「生のための文化」とであるという彼独特の考え方的一端をみて取ることができる。オルテガは、「生なき文化は存在しない、生命なき精神性は存在しない」（オルテガ、1970、p.215）とし、文化とは厳密な意味における生であり、自発性であり、「主観性」であり、文化が生き続けられるのは、主観からの不断の生命の流れを受け継いでいる間だけである（オルテガ、1970、pp.221-222）と説く。それは、人間的生という特異な現象は、生物学的な顔つきと精神的な顔つきの二つの相貌をもち、反対方向の引力の中心のように、生に作用する二つの異なった力に従っているからであるとし、オルテガ（1970、p.216）は、芸術の例をあげて説明する。

芸術的なものは、一面では主観の快であり、多面では美である。絵画の美は、絵画にとってはどうでもよい事実、すなわちその事実が原因となってわれわれが楽しくなるような事実から成り立っているのではない。ではなくてむしろ逆に、われわれを喜ばせる切な

る要求が絵画から物静かにわれわれに向けて出てくるのを意識するとき、その絵画は美しく思われるのである。

オルテガ (1970, p.216) は、文化的機能はまた同時に生物的機能であり、それゆえ文化は客観的あるいは超生命的法則だけによって支配されるのではなく、同時に生の法則に従うものであると認識しなければならないということを指摘しているのである。そして、文化とは、それぞれの時代が所有するところの生きた諸理念の体系であり、より適切には、それによって時代が生きているところの諸理念の体系である (オルテガ, 1978, p.67) とともに、「文化は生のプランであり、生存の密林における道標である」(オルテガ, 1978, p.73) とオルテガは述べる。すなわち、彼は、人間は常にその実存を支える地盤を固めよりよく生きることを課題とされているが、文化がまさにその役割を担っていると考えていることがここにみられる。さらに、文化の担い手としての人間のあるべき姿を貴族と大衆にわけて考えていた。貴族とは経済的に裕福であるという意味ではなく、精神的な貴族という意味であり、本来的に動的であるとオルテガ (1991, pp.108-109) は規定する。そしてその高貴な人とは、「知られた人」であり、皆に知られ認められるためには、計り知れない努力が必要であるという意味が含まれていると説いて、高貴な人 (貴族) は努力をした人であるとオルテガ (1999, pp.108-109) はいう。

4. 2. 文化論の根底にある思想的共通性

ここまで示してきたホイジンガとオルテガの文化論、ならびにそれぞれを前提としたスポーツに対する立場から、いくつかの思想的共通性が認められる。

一つ目として、両者が文化において努力の大切さを説いているにみられる。ホイジンガ (1990, pp.28-29) は、共同体の理想とされる安寧に向かう努力を文化は含んでいると考えていた。それに従い、文化の担い手とは、共同体として自らを律し、自らが環境に働きかけながら、あらゆる可能性の中で選択し決断しながら努力することが求められると彼は考えていた。一方、オルテガ (1961, p.46) は、人間は生きるところで生きることを始めなければならない、それゆえわれわれにとって生は与えられる以上に課せられているものであるゆえ、本質的にそれは努力であると述べる。また、文化とは、それぞれの時代が所有するところの生きた諸理念の体系であり、より適切には、それによって時代が生きているところの諸理念の体系である (オルテガ, 1978, p.67) とともに、「文化は生のプランであり、生存の密林における道標である」(オルテガ, 1978, p.73) とオルテガと語る。このように共同体の安寧へと努力することに文化をみていることに思想的共通性がみられる。

二つ目として、両者は、文化に力動的な特徴をみてい

た。ホイジンガは、文化を倫理的な要素を含む体験(活動)であり、絶えずその実現に向かう心がまえであると述べる。また、ホイジンガ (1991, p.33) は、文化とは常に抽象であり、一つの歴史的連関に対して我々が与えた名称であり、理念という言葉によってその本質をさされ得ないものであるという。ホイジンガ (1999, pp.32-33) は、文化現象が、たとえ我々にとってかつてある時に存在したものであり、さらには今なお存在する現実であるとしても、我々はそれを実在としては観察できないと主張する。こうした見解から、ホイジンガにとって、文化とは、概念化により実体化されるものでなく、何よりも生の現象である (下村, 1972, p.156) こと、そしてそれは動的であり流動的であることが認められる。一方、オルテガは、私は「私」をめぐる環境と直接つながっており、切っても切れない関係の中で実在していると考えていた。そうした自我としての私と環境との関係性ゆえに、生きていくためには常に生を課題として受け止め切り開いていく努力をしていかなければならない。そのため、自らの環境を受け入れるとともに、その環境との力動的な関係の中で対話し自分の生に適合したものを探していくことが重要であるとした。こうした理解のもとで、オルテガ (1969, pp.221-222) は、文化とは、人間が自己の生に加える解釈、自分の問題や生にかかわる必要なことを処理しようと工夫する、一連の解釈であるとともに、それは生のプランであり、生存の密林における道標であると述べた。また、文化とは厳密な意味における生であり、自発性であり、「主観性」であり、文化が生き続けられるのは、主観からの不断の生命の流れを受け継いでいる間だけであると説く。このように両者とも文化の力動的な性質をあげている。

三つ目として、文化の担い手に対して、ホイジンガは当為としての犠牲と奉仕の精神がその努力には欠かせないと述べる。加えて、文化とは、精神的側面と物質的側面の均衡と調和を必要とし、それを担保するためには、担い手として受動的ではなく自発的な態度が求められると説く。そして、こうした文化の基盤に遊びの精神が必要とされると指摘する。また、ホイジンガ (1991, pp.171-172) は、一般的な義務教育、社会階層の表面的な平均化、精神的、物的交流の極度の容易さによる画一化と多数化に晒され、文化の代用品によって満足する半教養人が、文化を担う人格にとって大敵であると述べる。一方、オルテガは、文化の真の価値は、「生のための文化」になることであり、「生なき文化は存在しない、生命なき精神性は存在しない」(オルテガ, 1970, p.215) とし、文化とは厳密な意味における生であり、自発性であり、「主観性」であると述べる。オルテガは、「生は教養があらねばならぬ、しかし文化は生命的であらねばならぬ」(オルテガ, 1970, p.217) と述べるが、それはどちらか一方によって均衡が崩されると退廃に巻き込まれて、教養のない生は野蛮になり、生命を奪われた文化は屈従と

なると考えていたからである。彼は、生を課題とする人間の、文化の担い手としての人間のあるべき姿として、貴族と大衆によってわけ、ここでの貴族とは経済的に裕福であるという意味ではなく、精神的な貴族という意味である。つまり、貴族とは、本来的に動的であり、そして高貴な人とは、「知られた人」であり、皆に知られ認められるためには、計り知れない努力が必要であるという意味が含まれていると説いて、高貴な人（貴族）は努力をした人であるとオルテガ（1999, pp.108-109）は考えていた。表現は違えど、両者においては、共同体の中で自発性と奉仕の精神が大切であり、凡庸な知識に満足するとともに、凡庸さを良しとしその権利を主張する、受動的な態度の取る文化の担い手を批難する態度がみられる。また、両者とも文化を育み洗練させていくことにおいてその担い手の自発性と主体性の必要性を示唆している。つまり、文化の担い手が、受動的になり自らの置かれている環境に甘んじ、自発的な努力を欠いてしまえば、文化が平均化され、標準化されてしまうと、その危機を強調しているのである。

以上のように、両者には、共通な思想的基盤がみられるものの、スポーツへの視点の当て方に違いがあった。オルテガは自発的な努力、すなわち、「いかなる強制からも生じてこない、完全に自由な、かつ生命力の盛んな衝動であるところの別のタイプの努力」（オルテガ、1969, p.255）とそうしたものが現れる人間の生きざまに品位や美しさが生まれ、それこそが尊いものであると価値づける。そうしたものがスポーツであると考えていた。オルテガは、文化を生を価値から捉え、スポーツもその文脈において理解する、否スポーツこそが生であるとも語るのであるが、ホイジンガにおいては、その精神なき生のありようが文化を喪失させると考えていた。彼は、競争的なものが文化に対してもつ意義は、「競い合う遊びの中で文化に向かうもの」（ホイジンガ、1989, p.127）であると述べ、スポーツには、競い合う遊びという形式のもとで、遊びの精神によって文化へと方向づけられていく可能性があると考えていたが、過剰で強力な闘争心によって、余裕やゆとりをなくし自由さや自在さのある行為が不自由な外的な義務感の強いものになってしまうと生の暴走を警告していた。こうした相違は、両者とも、生における理性、あるいは倫理的精神の重要性を人間ならびに文化の理解の核心においてはいたが、オルテガはそれを自明とし、ホイジンガはその危うさをみていたことにあると考えられる。

5. 結 語

本研究は、スポーツを文化的に享受する力を育む学びが求められている学校体育を含むスポーツ教育の方向性を導く機軸の手がかりを得るために、ホイジンガとオルテガの文化との関係におけるスポーツに対する考え方を

確認し、その前提としてあるそれぞれの文化論を探り、文化をめぐる思想的共通性を明らかにするとともに、スポーツに対する異なる見解の背景に言及することを目的としていた。その結果は次のように整理される。

- 1) ホイジンガは、スポーツに対して遊びという視角から当時のスポーツ（文化）状況を批判したが、スポーツ自体の文化的な価値を認めていた。オルテガは、スポーツの人間の生に対する意味と文化としての価値を高く認めていたが、彼の思想の根底にあるスポーツは、現実のスポーツというよりある種の理想としてのスポーツ像であることがうかがわれた。両者とも根本においてはスポーツの文化的価値を認めていた。
- 2) 両者の文化論のあわいから、共同体の安寧へと努力することに文化をみていること、文化とは力動的なものであること、そして、文化の担い手は自発的な態度により自らの置かれている環境を切り開いていくことが思想的な共通性としてあげられた。
- 3) オルテガは、自由で生命力の盛んな衝動であるところの自発的な努力としてのスポーツに人間的・文化的価値をおいていた。一方、ホイジンガは、精神なき生のありようが文化の喪失につながることに危惧をし、生の暴走を警告する中で、現実のスポーツがその道を辿っていることを見抜いた。両者とも、生における理性、あるいは倫理的精神の重要性を人間ならびに文化の理解の核心においてはいたが、オルテガはそれを自明とし、ホイジンガはその危うさを指摘していた。

以上のような結果を踏まえると、スポーツとはそれを行なう者や環境によっていかようにも姿を変えるものであり、たとえスポーツの文化的性格を認めたとしても、我々のスポーツとのかかわりにおいて自動的にスポーツを文化的に享受しつつ育んでいくことにはならない。そこには特定の集団に限定されない共同体の望ましい目的に向けた配慮や努力が必要であるということが両者の文化論から改めて確認されたといえる。そして、我々一人ひとりの、また、皆の安寧としてのスポーツ生活の充実への絶えざる自発的な努力が、スポーツを文化的に享受する機軸として理解され得る。こうした理解に基づき、スポーツの学びを構想し、その学びの過程を評価していくことが大切であると示唆される。

注

- 注1) 両者は少なからず親交があった。その具体的な出来事の一つとして、1938年の春、当時オランダのライデン大学の学長であったホイジンガからオルテガが連続講義をするように招聘を受けたことが伝えられている（渡辺、1996, p.77）。この事実は、互いに敬意を評していたことや思想的共通性を両

者が認めていたことから実現したものと推察される。

注2) これは、国家市民の本質およびそこから生ずるすべてのもの、すなわち、秩序ある行動、礼節、純化された風儀等の内容を含んでおり、「幸福な生活」、すなわち、天上の至福と地上の幸福という二つの目的に向けられていたものであった。前者においては、神学的な枢要徳としての信、望、愛の遵守、後者においては道義的、知的な徳の実践から生まれ得るとホイジンガ(1991, p.74)は述べている。

木孝訳(1969)ガリレオをめぐって. 法政大学出版局.
 オルテガ・イ・ガセット:長南実・井上正訳(1970)オルテガ著作集1. 白水社.
 オルテガ・イ・ガセット:西澤龍生訳(1973)傍観者<エル・エスペクタドール>. 筑摩書房, pp.311-330.
 里見元一郎(2001)ヨハン・ホイジンガ その歴史観と文明論. 近代文芸社.
 下村寅太郎(1972)精神史の森の中で—研究ノートより. 河出書房新社.
 田中義久(1994)文化. 見田宗介ほか編, [縮刷版] 社会学事典. 弘文堂, pp.780-782.
 渡辺修(1996)オルテガ 人と思想138. 清水書院.

文 献

堀米庸三(1975)解説. ホイジンガ:堀越孝一訳, 朝の影の中に. 中央公論社, pp.214-222.
 井上正(1970)解説. オルテガ・イ・ガセット:長南実・井上正訳, オルテガ著作集1. 白水社, pp.341-352.
 J.ホイジンガ:橋本富郎訳(1989a)アメリカ文化論 個人と大衆. 世界思想社.
 ヨハン・ホイジンガ:里見元一郎訳(1989b)ホモ・ルーデンス 文化のもつ遊びの要素についてのある定義づけの試み. 河出書房新社.
 ヨハン・ホイジンガ:藤縄千艸他訳(1990)明日の蔭りの中で. 河出書房新社.
 ヨハン・ホイジンガ:磯見昭太郎他訳(1991)汚された世界. 河出書房新社.
 J.オルテガ・イ・ガセー:西澤龍生訳(1974)現代文明の砂漠にて. 新泉社, pp.18-69.
 Kroeber, A.L., Kluckhohn, C. (2017) Culture: A Critical Review of Concepts and Definitions (Classic Reprint), Forgotten Books.
 中田光雄(1998)文化. 廣松渉ほか編, 岩波哲学・思想事典. 岩波書店, pp.1422-1423.
 生松敬三(1968)「文化」の概念の哲学史. 鶴見俊輔・生松敬三編, 岩波講座 哲学 XIII文化. 岩波書店, pp.73-101.
 オモー・グルーベ:永島惇正・岡出美則・市場俊之訳(1997)文化としてのスポーツ. ベースボールマガジン社.
 オモー・グルーベ:永島惇正ほか訳(2004)スポーツと人間 [文化的・教育的・倫理的側面]. 世界思想社.
 Ortega, Y. G. J. (1961) Über des Lebens sportlich-festlichen Sinn. In: Klöhn, G. (Hrsg.) Leibeserziehung und Sport in der modernen Gesellschaft. Julius Beltz, pp.33-49.
 オルテガ:井上正訳(1978)大学の使命. 新世界叢書.
 オルテガ:桑名一博訳(1999)大衆の反逆. 白水社.
 オルテガ・イ・ガセー:西澤龍生訳(2001)狩猟の哲学. 吉夏社.
 オルテガ・イ・ガセット:アンセルモ・マイタス, 佐々

〔平成31年4月16日 受付〕
 〔令和元年9月10日 受付〕